

BMC 海外派遣報告書

化学専攻 宗像研究室 D3 洪田昌弘

派遣時期 2009年8月30日－9月9日

派遣目的

国際学会 26th European conference on surface science (ECOSS-26, イタリア)への参加
及び Marburg 大学(ドイツ)、Elrangen 大学(ドイツ)への研究室訪問

私は、今回の BMC プログラムの海外派遣支援を受け、イタリア、パルマ市で開催された国際学会 ECOSS-26 に参加し、これまでの研究成果のポスター発表を行いました。その後、ドイツのマールブルグ市及びエルランゲン市にある研究室を訪問しました。

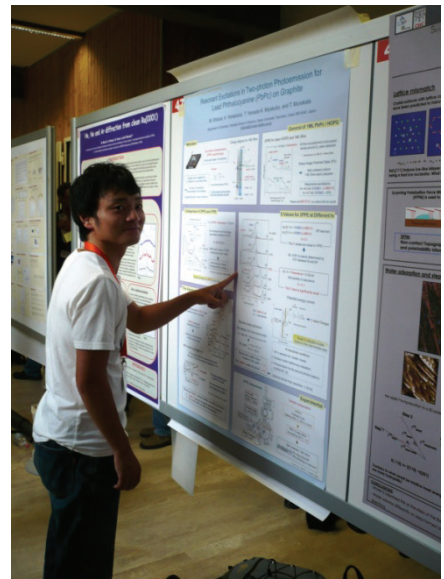
ECOSS は、ヨーロッパで毎年開催される表面科学に関する国際会議であり、世界中から千人規模の研究者が集まり情報交換が行われます。期間中の講演やポスター発表では、論文で発表されている成果はもちろん、まだ公表されていない最新の成果が聞けました。また、ポスター発表では自分の成果を世界にアピールする絶好の機会でした。しかし、一方で結果の羅列だけでは、少し違う分野の相手に対して、その価値を理解してもらうのは困難でした。今回の学会参加で、自分の研究に自信を持ち、その成果の意義を伝えることで、いかに相手を引き込むかがこれからの課題であると感じました。夜にはパルマ市特産の生ハムやパルメザンチーズに舌鼓を打ちながら、同じ分野の研究者と意見交換も行えました。

マールブルグ大学の Höfer 教授は私の研究分野での世界的権威であり、私は昨年現地研究室に 2 ヶ月間滞在しました。それからたった1年でしたが、実験室や最新のデータを見せていただき、研究が確実に進んでいることに感心しました。また今回の訪問では、指導者の同行がない環境で、新しい研究成果を交換し、ディスカッションを行えたことは私にとって強い刺激になったと同時に、自分がプロの研究者として駆け出しつつあるという自信と実感を得ることができました。

エルランゲン大学で訪問した研究室の Fauster 教授は、Höfer 教授同様、私の研究分野の最先端の研究者です。私の所属する研究室も含め、今回訪問した両研究室は実験装置の基本構成は殆ど同じですが、何かの模倣だけではなく、他にはないオリジナルを持ち、新しいことに挑戦しています。実験技術、結果の解釈などは、日本で研究を進めていく上で非常に参考になりました。その一方で私たちの研究室の独自のオリジナルをどのようにアピールしていくべきなのかを考えさせられました。もう一つ感じたことは、いずれの研究室も、学生がいかににも自分の研究に誇りをもち、非常に生き生きしていることです。少なくともヨーロッパの表面科学分野の進歩は彼らによって強く支えられていることを確信させられます。

私が目指す“最先端の研究者”とは、相手のオリジナルをきちんと評価した上で、自分のオリジナルを自信を持って世界にアピールできる人間であるべき、と改めて感じました。まだまだ駆け出しの私ですが、今回の学会参加、研究室訪問を通して、自分の研究者としてのモチベーションがぐっと上がりました。

最後になりましたが、今回の海外派遣において金銭面で大きくサポートしていただいた BMC プログラムに感謝いたします。また、重要な連絡、書類の処理をしていただいた事務の井上さん、茨木さんに感謝いたします。



ECOSS-26 ポスター発表会場にて



マールブルグ現地学生と